

(2021年3月1日受稿 2021年4月11日受理)

【実践紹介】

金剛コロニーの50年と地域福祉

——若松寮の役割に注目して——

酒井 誉里子 (元金剛コロニー職員)

連絡先 E-mail : rarus0302@icloud.com

はじめに

1996年からはじまった国の社会福祉基礎構造改革は、「契約」制度と応益負担の導入、福祉産業の育成などとあわせて、従来型の施設での生活から地域での生活への移行を推進した。たしかに地域での生活や自己決定は知的障害のある人たちにとっても欠かせないものではある。社会福祉基礎構造改革と連動した地域移行が、「自分づくり」、すなわち知的障害のある人たちの発達とどう結びついていくかは、今後数十年の単位の中で多面的な検討が必要だろう。

1960年代に全国的に広がったコロニー建設ブームからおおよそ半世紀が経過した。金剛コロニーはその建設ブームの初期に開設し2020年に50周年を迎えた。このような「コロニー」は、施設福祉の典型といわれ、得てして否定的に評価されるが、しかし、コロニーという施設機能をふまえてどのような実践を展開しえたのかについては、独自に論じられる必要がある。

本稿では、金剛コロニーが、実践の中で積み上げてきた独自の施設機能の特徴を生かして、どのように地域福祉への扉をひらいていったのかを、主に過去の事例を通して振り返る。現場

における実践報告による事例の検討では、状況に密着してそれぞれの事例が内包する多様な姿も第一次資料として記録されたもので、いわば〈生〉のままであるため、ありのままにとらえることが可能になる。その事例や実践は、今日の私たちにも多様で多面的な視点をもたらしてくれると期待される。と同時に、ある時間軸の幅の中で過去を再構成することによって、その歴史的な意味を取り出すこともできるのではないか。以上のような問題意識で以下のような事例と実践の再構成をこころみた。

1 金剛コロニーの概要と事例検討の視点

金剛コロニーは現在「大阪府立こんごう福祉センター」(改称2017年)となっているが、本稿ではすでに述べたように設立後の半世紀をふりかえろうとするものである。以下旧名称の金剛コロニーと表記し、「精神薄弱」など歴史的表記もそのままとした。

金剛コロニーは、1970年に知的障害児者の更生・自活訓練等を総合的に行う援護施設として大阪府によって設置され、運営は金剛コロニー開設前年の1969年に設立された大阪府障害者事業団があたっている。

金剛コロニーが開設されたのは、大阪府南部にある富田林市甘南備という地域で、金剛山の西麓に位置している。周囲は現在もミカン農家の多い農村地域で、敷地は山を切り開いて造成された広大なものである。東西・南北およそ2キロメートル近く、全体の面積は約85万平方メートルで、設立当初定員850名という大規模な入所施設であった（「金剛コロニー10年誌」p.30）。

開設当初は保護者の要望にあわせて、児童から成人までを対象としつつ、重度化にもこたえていくことを重視し、比較的長期間の処遇を予想していた。設置された施設の内訳は、重度寮1寮、児童寮1寮、更生寮3寮、授産寮2寮、退所寮の8寮からなっていた¹⁾。基本は生活施設であったが、日中の活動は生活の場とは別に独自に設定し、児童は敷地内の大阪府立富田林養護学校（現富田林支援学校）、重度寮の成人利用者は訓練班、更生寮の利用者は職能訓練センターに、授産寮の利用者は授産所に通所し、退所寮はコロニー外の企業などに通うことが基本であった。またコロニー敷地内には富田林支援学校のほか、診療所、売店、レストラン、理髪店などが設置されていた。これらは金剛コロニー内だけではなく、地域の住人からも利用されていた（「復刻 かんびー金剛コロニー創立20周年記念」p.9、以下「20年誌」）。

地域との関係では、金剛コロニー開設前から、施設からの退所（地域移行）を意識した「退所寮」が構想されていた。こうした地域移行は、当初から金剛コロニーの目的の一つとして認識されていたが、開設当初生活施設としての性格付けがあったこと、新しい人々の受け入れに追われていたという状況から、コロニー運営の重点課題として独自に追求されるどころまでには至らなかった（前出「20年誌」p.9）。

それが具体化され始めるのは、1971（昭和

46）年頃からである。授産施設利用者の中には作業に取り組む姿勢や生活態度から、地域の職場でも十分にやっていけそうな人たちがいた。その人たちのニーズに応えるために金剛コロニー内に寮職員と授産課職員からなるアフターケア委員会²⁾がもうけられた。これが「コロニーとして就労を前提とした地域とのかかわりをもつ第一歩」となった。

その後、1973（昭和48）年に金剛コロニーの中に地域移行を支援する「退所寮」としての位置づけをもつ若松寮が開設され、これによって金剛コロニーから地域に移行していく取り組みが本格的に進められることになった。大規模な入所施設の集合体であった金剛コロニーにとって、次の転機となったのは、まず1981（昭和56）年の「国際障害者年」である。以後、入所と保護に重点をおいた施設機能の転換がはかられていった³⁾。

一方、2003（平成15）年3月に策定された「第3次大阪府障害者計画」⁴⁾では、措置制度から契約制度に移行することにとめない公立の生活施設が民間委託にされていく動きがあったが、金剛コロニーについては引き続き府立施設としての独自機能をどう発揮していくのが検討された。そこでは、第一に利用者の地域生活への移行の重視、第二に強度行動障害児対応の強化（具体的には重症心身障害児施設の開設）、そして、第三に高齢化する知的障害者のための介護施設（特別養護老人ホーム）の新設などを組み込んだあらたな生活施設にと再編が提案された。従来の「コロニー」というと、障害のある人の人生の大半を過ごす大規模な施設、あるいは「終着駅」、というイメージを持たれるかも知れない。しかし、金剛コロニーの場合、上記のように開設当初から、「コロニーから地域へ」という発想を持ち、さまざまな形で「コロニー」と「地域」のかかわりを模索し、独自の

施設を開設して地域への移行も支援してきた。

ただ、地域移行はたんに居住する場が移ることではない。生活の場、生きていく上での拠り所が変わるということであり、同時に支援者との関係も大きく変化する。そのため、地域移行の過程で障害のある人たちも予想しなかったような新しい問題に直面することにもなる。

開設以降「金剛コロニー」の実践では当然コロニー内の生活を通じたものが多く積み上げられてきたが、ここでは、そうした中から金剛コロニーからの地域移行にかかわる事例や取り組みに注目し、教訓や今後の課題を探っていきたいと思う。

なお、ここで取り上げる事例はすでに公表されたもので、それに以上のような問題意識をもちながら検討を加えたものである。また、事例4のHさんについては本稿の執筆にあたり、あらかじめ本人の了解をえた。

2 事例の検討

(1) 事例1：若松寮（退所寮）からの報告
「社会参加への道——ヤングタウン入居者を通して——」⁵⁾ [以下（ ）内は引用頁]

以下は1981年～1983年の若松寮（退所寮）の取り組みである。

この時期金剛コロニーの入所者の中にも地域に出て生活することを希望している人たちがいたが、グループホームなどの制度（国の制度化は1989年）がないため、新しい地域生活を試みようとして若松寮が中心になって、大阪府の勤労青少年対策の一つである「ヤングタウン」⁶⁾に提案し、大阪府とも交渉して、「ヤングタウン」に近い事業所に日中通っているメンバーが中心となって入居した。

当時の担当職員に対する聴き取りによると、若松寮で暮らしていたころには、食事はコロ

ニーの給食があったので、あまり生活費がかからなかったものが若松寮から「ヤングタウン」にでると、食費など出費が増える。その上、病気などで休むと収入も減るので経済的な困窮度はさらにましていた。そこで保護者が管理する障害福祉基礎年金の中から毎月1万5千円程度援助をうけるようにしたり⁷⁾、年金を受給していない人については事業所と何度も何度も給料の増額の交渉を重ね⁸⁾生活費の確保をはかるなどの取り組みがなされた。

インタビューに応じた職員は「当時私は新採職員として若松寮に赴任したが、女子職員の中で車の運転ができるのは私だけだったので（「ヤングタウン」の：引用者）担当者になった。西も東も分からない中、給料の交渉までやられたのは大変というより驚きであり必死だった」と述べていた。

食事については、食費という経済的な面だけではなく食事の確保それ自体も切実な課題だった。先述のように「ヤングタウン」では食事の提供はないので、自分たちで食事の準備をする必要があり、これも若松寮での生活からすると大きな変化になった。女子の場合は朝食は皆で協力しながら買い出しをし、ご飯を炊き、集まって食べるなど節約もしていたが、夕食まではなかなか手が回らず、夕食は一人500円程度の食事を地域の食堂に食べに行っていた。「でもやっぱり足が出るんですよね、本当によく頑張っていたと思います」。これも当時の担当者の感想である。

まだこの時代「男尊女卑」の風潮も強く残っていて、特に男性にはあまり家事を求めていなかった。もちろん金剛コロニーでは、身の回りのことについて男女同じように経験するように配慮していたが、金剛コロニーの外では、やはりそのような違いも生じる。

そうした家事の経験というだけでなく、仲

間関係の有無、あるいは発達などが、問題の向き合い方を大きく左右することもわかってきた。

たとえば聴き取りでは「女子には2人ピックなしっかり者がいたんですよ」と述べられていた。一人はゆっくり考えるタイプ、もう一人は決めたら行動するタイプだったが、とても仲が良い。そしていろいろ話しあったことをまとめることもできた。そのため、「ヤングタウン」に移った後も若松寮の職員に連絡を取りながら日々の生活の中で生じた問題の「解決」にむかっていくことができていた。

ただ、男性の場合には、余ったパンを腐らせてかびたパンが100個くらい押し入れから出てきたこともあった。「お金を使い果たした」という場合でも「行方不明になり3か月後西成のあいりん地区で警察に保護された」(p.46)など、自身の困り事が援助要請につながらず、その場しのぎの解決になることも多かった。

そのため「ヤングタウン」での支援には「職員自らが言うのもおかしいが相当の力を要した」(p.51)と記されていた。

ただ「ヤングタウン」での生活が積み上がって行くにつれて、入居当初は、「小遣い帳みてください」「○○さんに△△といわれました」「あした～に行っていていいですか」など、若松寮にいたときと同じようなことを職員に求めて電話がかかってきていたが、だんだんと“間”が置けるようになり、病気をしても「ヤングタウン」で療養して若松寮には帰らない、お金に困っても若松寮には帰らないなどというようになっていった。

聴き取りでは「当時の施設は、今より〈囲われた中での生活〉という感じだったような気がします。解放感だったんじゃないのかな？ ヤングタウンの近くには大きな商業施設などもあって、歩いてデパートにも行きましたしね。

コロニーは山（の中：引用者）やと思ったことでしょう」とのことだった。こうした解放感もあるのか「コロニーには帰りたくない」という声が次第に多くなっていった。

「それはうわっ滑りな自由になりたいということでもないし、コロニーの管理された生活に戻りたくない、ということでもないように思える。多少の問題を抱えながらも、また少ない給料で苦しい生活をしながらも、精いっぱい生きている自信が、こうした言葉につながっていった」(p.53)。あわせて、「ヤングタウン」での暮らしで若者ならではの〈シティ的解放感〉を味わったことも大きいように思える。

こうした変化をまのあたりにして職員も変わっていった。職員も「絶えず、心情的側面も含めて、いろいろな形で問題提起を受けて」「彼らも人間として成長していくという」ことを実感し、それを職員の「心の糧として取り組んで」(p.53)いくようになっていった。

また「ヤングタウン」にはもともと相談員として「ペアレントさん」と呼ばれる職員が配置されていて、入居者たちは金剛コロニーの職員だけでなくこうした人たちの援助も受けていた。しかしその後も若松寮からの支援の頻度はあまり変化していない。それは〈山の中〉から〈シティ的解放感〉を満喫できる「ヤングタウン」へと住む場所がかわっても、すぐにそこが生活の拠り所になるわけではなく、そうした移行の支援を、若松寮の側が担う必要があったということだろう。なお当時の若松寮は、寮長の意向で数年間職員の異動がなかったが、それが職員と利用者関係を深めていくことにもなっていたと思われる。その中で、職員の専門性の広がりや深まりもあったのではないだろうか。

その後「ヤングタウン」入居の年齢制限が35歳と決められていたため、入居者たちの年齢が上回っていったこともあり退居となって

「ヤングタウン」での取り組みは終わることになる。

ただこの「ヤングタウン」で過ごした人たちには、「少ない給料で苦しい生活をしながらも、精いっぱい生きている自信」(p.53)は30年を過ぎた現在にも続いているようで、多くの経験者は現在高齢期にさしかかっているが、今でも「元気なうちは働くんだ」と作業所、事業所に通所し、「働いて稼ぐ」ことを希望している。「ヤングタウン」は、障害者の施策ではなく青少年の雇用対策を利用したものであるが、青年という世代共通の経験の中で、仕事や暮らしを通じての誇りをいわば〈世代の誇り〉として経験できたことの意味は大きいように思われる。

そのために、送り出す側の移行の支援として、コロニー内での職員との関係づくりなど系統的な積み上げの必要性、困り事に直面したときの中身をまとめる力、さらに援助要請ができる力と関係づくり、などの重要性を強く感じる。

この実践の教訓は、グループホームなど、地域で暮らす手立てなどが何もない中で、地域で暮らし始めた利用者たちの「コロニーには帰りたくない」の声に寄り添って実践を積み重ねていった若松寮の職員と「ヤングタウン」で暮らす若松寮利用者の協同が、地域における生活をはじめるにあたって欠かせないことを見出す契機となり、お互いをより強くし地域生活の時代を切り開いていったという点であろう。

(2) 事例2：かしのき寮(更生寮)からの報告「N子の4年10か月——施設での生活——」⁹⁾
[以下()内は引用頁]

N子さんの家庭環境は複雑だった。父は賭け事にのめり込み定職につかず、母は喘息があり公害認定を受けて家で過ごしていた。また、母

に知的障害があった。そして、両親それぞれの交際相手が家に出入りし、N子さんについても父親と父親の交際相手が金剛コロニー入所後も何かと関わりを持っていた。

N子さんの金剛コロニーでの様子を要約すると以下の通りである(p.74)。

N子さんは以上のような生活環境をそのまま受け入れて育ち、中学校を卒業するとすぐに就職したが、そこを2か月もたたないうちに退職し、またこの頃よりてんかん発作が始まる。その後半年間、家で過ごしている間に異性関係の問題が生じるようになり、通所施設を利用するようになったが、支援が家庭生活まで行き届かず施設に通わない日が多くなってきてコロニー入所となる。

入所後は、かしのき寮(更生寮)から「他部署に通わない利用者がする作業」への参加や、同様にある授産寮の作業に参加。その後1982年5月授産課養成部¹⁰⁾に通うようになる。

養成部実習中には、2か月の間に5回の所在不明、自宅への長期外泊中にリストカット、家で大暴れするなどが繰り返されていた。また、通勤しても「真っ青になって倒れた。仕事にならない」といった連絡を受け何度も職員が迎えに行くなどという状況が続き、実習は4か月で打ち切りとなり、寮で過ごすこととなった。1983年1月より再び授産課に通所するが、N子さんの気持ちには寄り添えていなかったようで、「『もっと自由が欲しい』などといってヒステリックになり、大声でどなり散らすということが多くなり」「長期に休んだり」(p.73)がみられた。そして自宅への長期帰宅から戻らない理由は授産課に通所しなければならないことがわかり、授産課を除籍することになった。地域事業所への実習や、授産課への通所のない生活にもどったN子さんにとっては「一からのやり直し」(p.76)であったと報告されているが、

N子さんの入所以来の行動を振り返ったとき、N子さんはそうした自分の行動をよくない行動だと思えてもそれを自分だけでは乗り越えられなくて、授産課での長期欠席や職場実習先での「仕事にならない」(p.73)状態だった。そして最終的に誰にも告げずに出て行って行方不明になることにつながったのではないかという職員の気づきから、もう一度N子さんの発達の方に寄り添ってやり直していくことになった。その後、N子さんの力にふさわしい仕事がないかと検討がされ、同じ寮内の他の生活棟での「ハウスキーピング」が選ばれた。N子さんが生活している棟のハウスキーピングは「お手伝い」の域を出ないが、他の棟でのハウスキーピングは「仕事」という意識につながっていくだろうし、それぞれの棟で関わる職員はN子さんをよく知っていて適切なかかわりができるのではないかと、ということで、この「ハウスキーピング」が選ばれた。仕事内容は洗濯、掃除、昼食準備などで、それがN子さんによくあったのか、その後5か月続けることができたと言われている。

こうしたN子さんの変化に期待が寄せられながらも、N子さんは父の骨折をきっかけに気持ちが家庭の方に向いてしまったことや、父には内緒ですすめた障害基礎年金の受給が知られてしまったことなどが理由で退所になり、この実践は5か月で幕を閉じた。ここではなぜN子さんが「ハウスキーピング」は比較的よく頑張れたのかについて考えてみたい。

ハウスキーピングの仕事はN子さんには自宅の生活環境から考えて身につけていたとは考えにくいですが、仕事の形態が補助的であったことで、具体的な指導がN子さんの気持ちを添わせる形でおこなっていったことなどがあげられる。この「ハウスキーピング」という仕事は補助的であるがゆえに、N子さんにとってわから

ないことや、うまくできないことが起こっても「N子さんをよく知っていて、指導もしてくれる」(p.76)職員と気持ちを添わせ相談しながら仕事をしていくことができたのではないだろうか。

それがN子さんに「あった」ということなのではないだろうか。えてして私たちは、仕事という一人でするかどうかで評価してしまいがちであるが、いっしょに相談しながらすすめていける仕事、N子さんが求めていたのは「一人でできるように」という方向性より、「力を合わせて」という方向性だったのではないだろうか。

(3) 事例3：若松寮（退所寮）からの報告
「ケア付き住宅「大平ホーム」の実践をとおして」¹¹⁾ [以下（ ）内は引用頁]

この報告はグループホームの制度ができた1989年に書かれたものである。若松寮がケア付き住宅を開設したのは、その3年前1986年のことである。

「大阪府においては若松寮が実施している8か所、また砂川センターのOB・保護者会等の実施している3か所の計11か所のグループホームがある。しかしいまだ制度的な裏付けはなく様々な面で不安定な基盤しか持ち得ていないのが現状」(p.2)であった。

とりわけ、「今後さらにクローズアップされるであろう精神薄弱者の地域生活を考え」(p.1)の上では、障害が重いとされる人たちの問題を抜きにはできない。若松寮が開設した「大平ホーム」では、国の制度がないなか、重度の人たちは「一定の援助を有料で受けながら、共同生活を送っている」(p.1)。こうした「大平ホーム」での取り組みは、知的障害が重度である場合の「生活の在り方を見つめる」(p.1)ことになる。

障害のある人たちにとって、日常生活のささいなことも経験できていないことが多い。それが重度の人たちにおいてはなおさらである。それは、「大平ホーム」で暮らすようになって顕在化する。

例えば出かける際に玄関で鍵をかけるということ、あるいは朝起きるために目覚まし時計をセットするということが「大平ホーム」の生活では第1日目から不可欠であったが、こうしたことはそれまでの金剛コロニーの生活では必要がなかった。同じように食事も給食であったので、出てくるのが当たり前で暮らしてであった。ましてや地域生活で欠かせない基本である「近所の人に見られても恥ずかしくない」(p.9) 暮らしぶりが必要であることなどは、それほど切実だとは思っていなかった。

「大平ホーム」の世話人は地域に暮らすふつうの主婦たちで、知的障害のある人たちに対する知識があるわけではなかった。ただ、金剛コロニーの職員の家族であったので、金剛コロニーの行事などに参加するなど、それまでも障害のある人たちの身近な所にいた人たちだった。

こうした「大平ホーム」の世話人は、まずこうした暮らしの些細ではあるが欠かせない基本を丁寧に教えていくことになった。はじめの頃は、それまでできなかったことや、関心の持てなかったことが、できるようになり意識できるようになった。また、気づけたことを伝える場合にも、施設とは違っていわば一つ屋根の下にいるという親密さがあった。そのため、この頃の入居者と世話人の関係は順調で「世話人の注意や助言にも素直」に聞く姿勢がみられていた(p.9)。

このようにして「大平ホーム」での入居者と世話人の生活が順調に積み上がっていった。入所者の中にも、「大平ホーム」での生活に手ご

たえや金剛コロニーから新しい生活の場に出たという誇りも育ってきた。と同時に、事業所の都合で作業内容の変更になったり、解雇された入所者もでてきて、いわば社会との関係で生じる混乱や不安も直接に「大平ホーム」に持ち込まれてくることも増えるようになった。

こうした中で、世話人に対して「入居者のわがままや甘えが目立ってきた」(p.10)。また、世話人がそれまで同様に生活の基本を教えようとすると逆に入居者が「プライバシーに口を挟まないでください」(p.10)などと発言する。時には、世話人に悪態をつくようなこともみられるようになっていった。こうしたできごとは「世話人にとっては思いがけないことであり、かなりショックを受けられたようで、そのことについて職員に相談があった」(p.10)。

そこで、若松寮から入所者に対して「世話人に対する態度や生活に対する意識を考えてみよう」という働きかけ(p.10)がなされ、同時に世話人にあらためて入所者の発達や障害についての説明もなされた。こうした働きかけを通じて世話人からは「この人たちとは、気長に付き合っていくことが必要ですね」(p.10)と発言されるようになった。今日、グループホームが制度化され、入所施設建設の抑制という現実の中で、こうした「大平ホーム」の経験は、今の知的障害のある人の支援とも重なるものである。

制度化されたグループホームの運営条件のもとでも、大平ホームの世話人のように、障害のある人たちの支援を経験したことがない人たちの力を借りなければ維持できないことが多かった。グループホームの世話人は、グループホームという変則的な勤務形態であっても障害のある人たちの生活を支えようと応じてくれる熱意や情熱がある。また、暮らしの達人で、その達人の目から入居者の暮らしぶりにかかわろうと

する。

それは家族のような共同体的な関係を基本に支援をしようとすることになる。一方、入居者は、金剛コロニーという大きな組織で専門性をもって運営されていたところから移ってくる。そこで世話人も入居者も、それまでの関係のつくり方をそのまま持ち込む訳にはいかない。そうしたことが上にみたような事件となって噴出してきたといえる。

また関係という意味では、成人期にある知的障害の人たちを理解する難しさもある。知的障害が重度といわれても、あいさつが丁寧にできたり、いわゆる〈おとな〉の日常会話ができる人たちも多い。そこだけを見るとついつい「おとななのに!」と評価が厳しくなりがちだ。

また〈おとな〉の日常会話ができるからといって、配置転換や解雇に対するいらだちや腹立ちをうまく言語化できるとは限らない。そうしたモヤモヤを生活の場でなんとかおさめて仕事の場にむかっていく必要があるのに、うまく出せずイライラを世話人につけてしまう。また、〈おとな〉の日常会話が、ちょうど役割遊びの場面で〈おとな〉の会話が再現されるのと似た状況である場合もある。そのような〈役割遊び的会話〉には強い人・大きな人、優しい人など憧れる人になりたいという変身の願いが背景にある。世話人に対する悪態や荒々しい言葉遣いが、そうした変身の願いと結びついて発せられる場合もある。

生活者という面では「達人」であっても入居者の障害については「素人」である世話人に対しての独自の援助が必要であるといえよう。グループホームでは、入居者の生活が一步社会に開かれていくのであるが、グループホームのスタッフにも施設や専門機関などに開かれた関係が重要になるのではないだろうか。

(4) 事例4：職場実習委員会からの報告

「地域生活に向けて——2」¹²⁾ [以下()内の頁は引用頁]

Hさんは、金剛コロニーで1981年に初めて結婚に至った人である。家庭をもって、地域で生活し三児をもうけた。結婚当初は夫の両親と同居し、そこでいろいろ援助され、生活のあれこれをこまごまと教えてもらいながら、二児の子育てをしていた。1983年に両親の家から出た後、夫婦二人だけの育児に困難を抱えることになったので、福祉事務所のケースワーカー、子どもが通っている保育所の保育士、地域の保健師などがチームでHさんの生活全般を支援していた。

ところがそのようにして生活がうまく進み始めると、Hさんは日中の時間を持って余すようになり、パチンコなどで時間を費やすことが見られるようになっていった。

そして、1985年に3人目を出産した頃から「産後うつ」のような状態となった。それまでしていた家事もできなくなり、家はたちまち「ゴミ屋敷」のような状態になった。そして、はた目にもわかるほど精神的にも落ち込んでしまった。

これ以前にも若松寮はHさんを継続して支援してきていたが、このときも、福祉事務所のケースワーカー、子どもが通う学校の教員、保育所の保育士、保健所の保健師などと共に若松寮の職員も交えて話し合いがもたれ、生活の立て直しが図られた。この間子どもと父親は父親の実家に戻る。

「母親(Hさん：引用者)の状態は思いの他重症でこの後しばらく入院生活となった。退院後若松寮で療養するが、育児のできる状態に回復するには至らず、結果的には離婚再入所(若松寮に：引用者)ということになってしまった」(p.5)。

筆者が関わったのはこのころからであった。Hさんは若松寮に再び入所して、子ども3人と離れて暮らすことになったが、親しい若松寮の職員や利用者との暮らしの中で次第に安定を取り戻し、生活リズムや、金銭の管理など生活の中で必要なことを再度学びなおしていくことになる。Hさんは、その後地域の事業所に就職しグループホームで過ごすことになった。

この間も、夫の家に同居するHさんの子どもたちとの連絡が途切れることはなかった。グループホームで暮らし始めると、一緒に映画に行ったり、食事をしたりしていた。グループホームで過ごすHさんに対しても若松寮の支援は続けられた。例えば子どもの進路の問題などを若松寮の職員と一緒に考えてHさんと子どもの新しい関係を作り出すことができるようになっていった。

Hさんは、現在65歳になっているが、2人の孫にも恵まれ、生活保護を受けながらグループホームで暮らしている。

Hさんは、最近自分のことも周りの人たちのことも、一歩離れたところから見るできるようになってきた。周りの友人や、家族との関係で感情的な面でも自分をコントロールできるようになっている。

障害のある人たちの支援は、ライフステージごとに中心的な機関が変わっていく。また生活の場所が変わると、実際に支援する人も変わる。こうして支援の仕組みが変わるのであるが、Hさんの歩みは続いている。そして、Hさんにとって3人目の子どもの妊娠・出産のときのように、それまで積み上げてきた歩みが一気に崩れてしまうこともある。おそらくHさんにかぎらず、人生の歩みは右肩上がり一方向のまっすぐな軌跡をたどるのではないのだろう。そうした谷間にぶつかったとき、いったん出た場所にもどって再起するエネルギーを蓄えられ

る場所（Hさんの場合若松寮）があることの意味は大きい。

Hさんの結婚にいたる経過でいろいろ私たちの不十分な点があった。しかし、孫に恵まれ孫自慢をしてくれるHさんの姿をみると、Hさんにとって結婚や出産はかけがえのないものをもたらしたように思う。

3 事例から見える金剛コロニーの施設機能の重要性と地域移行支援の条件

(1) 生活と日中活動（「労働」）の「二分化」

金剛コロニーは、開設時からその敷地を居住区と生産区に分けており、それぞれの居住区（寮）から生産区である昼間部署（日中活動）に通うという形で運営していた。重度寮には訓練班が、更生寮には職能訓練課（後に「職能作業課」と名称変更）が、授産寮には授産課が対応して、それぞれの日中の「労働」を保障し、それぞれに合った指導と訓練を用意しようとしてきた。

その意味で金剛コロニーは「指導と訓練などが有機的に連携された集落的共同体となっていた。その庇護された環境において、その人に応じた生活の場を用意するという考え方、その人なりの活動の場を用意し、その中身を豊かなものにするということを運営の目標に据えたいとの考えに基づき、日々の生活リズムを持たせるための生活区、訓練区を分離するという二分化処遇を採用した」¹³⁾。

また昼間部署における訓練生産活動を独立した形で行い、実態に合わせて生産内容を変えて「ステップアップ」も期待していた。

そして1974年には、それを金剛コロニーの外にもひろげていく方向がとられる（前述のアフターケア委員会、そして職場実習委員会への改組と地域での職場開拓）。

本稿2(2)で紹介したN子さんは、更生寮在籍のまま、その「二分化」した施設機能を活用した事例といえる。N子さんの場合には、最終的に家庭に戻るようになったが、金剛コロニー内の「二分化」の運営を活かして、N子さんにあった仕事のあり方を探ることはできた。こうした実践ができた背景には、「ステップアップ」をめざして多様な仕事を模索する昼間部署と暮らしを支える寮とがそれぞれに独立しながらも連携していくシステムがあったからだ。こうした取り組みが1980年以降の地域就労への貴重な経験となっていったと考えられる。

(2)「退所寮」との関連から

金剛コロニーの開設当時、入所を希望する保護者の多くは「施設の中こそ障害者の幸せはある」と考えていた。ただ金剛コロニーとしては、開設時から入所者が退所をしていくことを知的障害のある人たちの一つの自立の姿とみていた。

その機能を実際に担ったのが若松寮である。若松寮は当時、施設区分では授産施設であったが「コロニーにおける処遇システムの中で若松寮は、職場実習を通じて社会自立を目指す退所寮としての役割をもって運営されてきた」(「20年誌」p.50)。

2(1)で紹介した「ヤングタウン」を利用する試みは、一般的な「コロニー」運営の延長線上では考えられないものである。特に、就職先だけではなく、所得保障の支援や青少年の雇用対策である生活の場を障害のある人たちにも開かれたものにしていく取り組みは、グループホームなどの制度がない中での苦肉の策であったとはいえ、多様な退所のみちすじを開拓したものといえる。また、そのことが、問題を抱えながらも、あるいは少ない給料で苦しい生活を

しながらも、精いっぱい生きている自信を育み、それが「コロニーへは帰りたくない」とい気持ちにつながっていった。一方で、それを支える役割も、直接の支援から相談に乗るなど後方からの間接的な支援に転換していったことも教訓的である。

このような後方からの間接支援は、金剛コロニーからグループホームへと退所していく人たちの場合にも欠かせないが、支援の軸として、グループホーム世話人の支援、つまり支援者への支援としてあらたな展開をみせていく。それが金剛コロニーの職員としては、新しい専門性の深まりの契機ともなった。一つは、金剛コロニーを退所し地域での生活に移行する場合、金剛コロニーの中で必ずしも想定していなかったような「生活者」としてのきめ細かな気づきを得ることができた。例えば、玄関の施錠や目覚まし時計のセットなど、である。今一つは、世話人への支援を通じて、職員が自らの指導をみなおし言語化する必要にせまられたことで、このことも自らの専門性を問う機会にもなったと思われるのである。

さらに、2(4)でみたHさんの場合のように、いったん戻ってきて再出発する場合の抛り所としての機能も必要であることが示唆された。地域の暮らしの姿は多様である。そのため地域への移行にあたって予想しきれない問題も多くある。一つ一つの退所が試みとしての性格をもつとさえ言える。その場合に、退所して地域に移行した人が、再び戻ってこられる場としての退所寮である場合、試みの選択肢も広がってくる。困難をかかえて戻ってくるのできる退所寮の機能は、金剛コロニーを障害のある人たちの人生の終着駅にしないための重要な抛り所であった。

4 地域移行に必要な機能と今後の地域福祉に求められること

(1) 暮らしの立て直しに必要な力：自覚的治癒力と施設機能

施設暮らしをしていた利用者が地域で暮らすことになっても、多くの場合何らかの失敗をすることになったが、受けた打撃や痛手は、その人丸ごとに影響を及ぼすものである。だから、回復にはそうした痛手を修復する〈治癒力〉が大切になってくると思われる。

それは、その人の中に潜む自然治癒力であるといえるが、それを蘇らせて回復させていく場合には「自覚された治癒力」といえるかもしれない。その場合に、暮らしを立て直していく具体的支援が「自然治癒力」を「自覚された治癒力」に変えていく上で土台になっていくのではないだろうか。

その土台の上で、失敗を「うまくいかなかった」と感じ、「やりそこなった」と評価すること自体は必ずしも否定されるべきではないだろう。安全や安心を確保できる条件のもとで「失敗」に向き合えることが重要なだろう。一人ひとりが自立して過ごすことが前提で成り立っている地域の生活で、しかも周りを巻き込むような失敗が生じた場合、そうした「自覚された治癒力」の土台を確保することが難しい。ここに地域と結びついた生活施設の役割があるのではないだろうか。

(2) 職員集団と専門性の大切さについて

筆者が2(4)で紹介したHさんの担当になったのは若松寮に異動になってすぐのときだった。それまで地域で生活する退所者のことなど全く知らなかったし、運転技術も未熟で職場と自宅の往復くらいしか運転経験のない私に

「〇〇行って△△してきてあげて」「福祉事務所の××さんとこういうことを相談してきて」などと声がかかり、勤務時間中にあちこちへ車で行かされた。それは、施設内職員の本来の業務である直接処遇の姿とは大きくかけ離れていた。また、施設外のさまざまな専門職と意見交換することもほとんど経験したことがなかった。

それでも仕事できたのは、当時の筆者のような未熟な担当を見守る先輩職員の援助や、退所者についても会議の議題としてあげて検討する職員会議があったからである。2で紹介した事例は、いずれも金剛コロニーの職員が関わり援助しているが、そうした援助は、個人としての関わりではなく、職員集団としての支援であった。いいかえると施設職員としての専門性として利用者への援助の仕方や関わり方を学び、利用者の特性などに応じた援助の方法や工夫を金剛コロニーの外に伝えることになったのである。

(3) 過去の日本の施設の実践から学ぶことを大切に

金剛コロニーは、実はいろいろなところで近江学園とのつながりがある。近江学園の糸賀一雄は、大阪府知事の諮問機関である児童福祉審議会コロニー特別部会の委員をしており、金剛コロニーの開設構想立案にも関与していた¹⁴⁾し、金剛コロニーの職員だった矢野隆夫¹⁵⁾は長く近江学園に勤務していた。

当時の厚生省児童家庭局長の提案¹⁶⁾と距離を置いて設置・運営されたのは、こうした人たちの影響があったからである。

ここに紹介した実践は「コロニーの風土」(「明日に向かって一金剛コロニー 20年誌」p.12)が生み出してきたところが大きいと筆者は考えている。この風土とは「組織末端の自由

度の高い価値観の多様化する環境は……入所者の生活を支えるという観点からは、この自由度の高さは自発性、自立性、創意工夫を生かす要素となって大きなメリットと言える……これが今日の伸びやかなコロニーの風土を作っていると考えられる」(同 p.12)と書かれているものであるが、こうして積み上げられた実践は上にみたように糸賀の考えを足場にしつつ、さらに新しい展開をみせていたといえるだろう。

以上のような金剛コロニーの伝統や歴史、実践を、今後金剛福祉センターとしての地域福祉に生かして行ってほしいと筆者は願っている。

(さかい よりこ)

注

- 1) これら寮は、現在はなくなっている施設の体系・種類である「総合援護施設」の表記に基づいている。知的障害者入所更生施設3寮、知的障害者入所授産施設3寮、重度寮、児童寮は、15人から20人程度の棟(小舎)に分かれて運営され、一つの寮(退所寮を除く)は5棟からなっていた。
1970年に開所した金剛コロニーは、知的障害児施設「しいのき寮(定員100人)」、知的障害者更生施設「くすのき寮(定員120人)」、職能訓練所(現在は、職能作業課)からなっていた。翌1971年に知的障害児施設(定員60人)」、知的障害者更生施設(定員60人)の「すぎのき寮(定員40人)」、授産所(現在は授産課)」、診療部(現在病院および地域福祉課)が開設された。さらに、1972年に知的障害者授産施設「ひのき寮(定員120人)」、知的障害者更生施設「かしのき寮(定員120人)」が開設された。1973年には、知的障害者更生施設「もみのき寮(定員120人)」、知的障害者授産施設「若松寮(定員50人)」が開設された。
- 2) アフターケア委員会は、1974年に企画調整室も関わるようになり「職場実習委員会」に改組され、1978年には退所寮の位置づけの若松寮、1980年に更生寮、1986年には児童寮が加わっている。
- 3) 「大阪府障がい者事業団事業団の歩み」(「大阪府障がい者事業団」ホームページ「事業団の概要」<https://www.sjf-osaka.net/jigyodan/> 2021年2月28日閲覧)。
- 4) 「第3次大阪府障害者計画」の該当箇所は上記「大阪府障がい者事業団」ホームページの記載より。
- 5) 「金剛コロニー10年誌」、金剛コロニー、1980年。
- 6) 1960年代の「高度経済成長」の中で、大阪には毎年多くの若年労働者が他府県から流入してきていたが、住宅の供給や企業の福利厚生施設の整備は十分でなかった。大阪府は「働く青少年のために快適な住まいと生活環境を提供し、あわせて好ましい人間関係を基盤とする地域に密着した健全育成を図り、さらには雇用の促進と安定に資するための総合的な勤労青少年対策」としてヤングタウンが計画された(瀬渡章子「ヤングタウン」は今?—泉北ニュータウン青少年の町の軌跡—都市住宅学、第62号、2008年)。なお1972年3月に第一期の入居が始まっている。また1971年には黒田一革新府政が誕生している。
「ヤングタウン」は、公営住宅を利用した勤労青年を対象とした大阪府の施策。入居資格は、大阪府下に住所または勤務先のある満15～35歳までの独身勤労者となっていた。「ヤングタウン」の特色として、入居者の身近な相談、助言者として、公的住宅1棟(500人)について、3世帯の「ヤングタウンペアレント」を配置していた。居室の広さは、約11㎡で、1室1人入居であり、家賃は月額7380円と共益費5850円である(前出「金剛コロニー10年誌」p.44)。「(数々の問題はあったが)それでも入居ができた要因として、事務局長が……障害をもっている人達に理解があったことと、(ヤングタウンの)入居者がたいへん少なかったことが言えると思う」(同 p.44)。
- 7) 当時は成人障害者であっても障害基礎年金を親が管理している場合が多かった。
- 8) 聴き取りでは「この事業所は障害者雇用で大阪府から表彰されていたが、なかなか厳しい交渉であった」とのことであった。
- 9) 「大阪府立金剛コロニー紀要Ⅷ」大阪府立精神薄弱者事業団、1992年。
- 10) 金剛コロニーでは1971年度に利用者の作業部門5つをまとめて授産課となった。その後1980年には15か所となった。地域移行を中心

- 的な課題として、地域実習対象者の適性を見るために、授産課養成部として独立したもの。
- 11) 「大阪府立金剛コロニー紀要Ⅸ」大阪府立精神薄弱者事業団, 1989年.
 - 12) 「地域生活に向けて——2」内部, 2000年.
 - 13) 「明日に向かって——金剛コロニー20年誌——」大阪府立金剛コロニー, 1990年, p.29.
 - 14) 前出「金剛コロニー10年誌」p.5.
 - 15) 矢野隆夫は1923年生まれで1996年に亡くなっている。著書に、『心身障害者のためのコロニー論』(日本精神薄弱者愛護協会1867年)
 - などがある。1947年10月創設直後の近江学園に就職し1970年に近江学園を退職し、金剛コロニーに赴任した。1971年に金剛コロニーのすぎのき寮寮長、1975年にはくすのき寮寮長も兼務。1980年金剛コロニーを退職。なお矢野隆夫没後に出された『虚栗集』(碧い孔雀社1997年)に詳しい年譜がある。
 - 16) 渥美節夫「これからの障害児政策(下)——コロニーと明日への抱負——」両親の集い, No.135, 1967年, pp.18-21.